

地方に生きる若者たちの現在 新しい公共・新しい働き方・新しい家族？

阿部真大（甲南大学）

1. 地方に生きる若者たちの変化と現状

『地方にこもる若者たち 一都会と田舎の間に出現した新しい社会』（阿部 2013）において、報告者は、1990年代以降のモータライゼーションが、地方に生きる若者たちの消費、人間関係、仕事にもたらす影響について考察した。若者たちは、イオンモールに代表される快適な消費環境、友人と家族を中心に形成されるノイズレスな人間関係を享受しつつも、行き先が不透明な雇用状況、地域コミュニティの衰退のもたらす将来不安に苛まれてもいる。

こうした不安が「昔は良かった」というノスタルジックな感情を人々に呼び起こし、近年の「昭和ノスタルジー」ブームの背景のひとつとなっているのだが、それは、本当に「良い」ものだったのだろうか？報告者は、『地方ならお金がなくても幸せでしょ』とか言うな！ 一日本を蝕む「おしつけ地方論』（阿部 2018）において、旧来の地域共同体に様々な問題（家父長制的、閉鎖的な性格など）があったゆえに、戦後の人々は郊外的な生活に憧れていたことを指摘した。

つまり、「新しい公共」は、「古い公共」の問題点を克服しながら、形づくられるべきである。ここで注目したのは、ローカルなクリエイティブ層による、地域の枠を超えた「トランスローカル」なネットワークの形成である。『会社のなかの「仕事」 社会のなかの「仕事」 一資本主義経済下の職業の考え方』（阿部 2023）では、遠藤薫の三層モラルコンフリクトモデル（遠藤 2007）を用いつつ、こうしたネットワークを形成する「ローカルエリート」たちによるローカライズド文化を媒介にした「新しい公共」の形成＝「下からのグローバリゼーション」の動きについて指摘した。

2. 分断と家族の問題

今後、考えるべきことのひとつ目は、下からのグローバリゼーションが、どの程度、ローカルなレベルで浸透しているのかという点である。本報告では、2023年の夏に京丹後市で行ったアンケート調査をもとに、まず、この点を確認したい。しばしば、都市的なローカルクリエイティブ層と旧住民との間の「分断」が問題となるが、その間に起こりうる「誤配」（東 2017）が両者を結びつけることもある。本報告では、そのような「誤配」の場となりうるクリエイティブな「場」の可能性を考えたい。

もう一つ、考えなくてはならないのは、「新しい公共」、「新しい働き方」は「新しい家族」をとともなうものなのかという点である。この点は、本シンポジウムのテーマと大きく関わる点である。ローカルなレベルでのワークスタイル、ライフスタイルの変化は、新自由主義的な社会経済環境の変化に適応するだけのものなのか（その際、近代家族的な性別役割分業は温存される可能性もある）、より幅広い、リベラルな価値観の変化を促すものなのか。本シンポジウムでは、この点についての議論も期待したい。

参考文献

- 阿部真大 2013 『地方にこもる若者たち 一都会と田舎の間に出現した新しい社会』 朝日新聞出版社
—— 2018 『「地方ならお金がなくても幸せでしょ」とか言うな！ 一日本を蝕む「おしつけ地方論」』 朝日新聞出版社
—— 2023 『会社のなかの「仕事」 社会のなかの「仕事」 一資本主義経済下の職業の考え方』 光文社
東浩紀 2017 『ゲンロン0 観光客の哲学』 ゲンロン
遠藤薫 2007 「現代文化におけるグローバリゼーション／ローカリゼーションのねじれ」 遠藤薫編 『グローバリゼーションと文化変容』 世界思想社

（キーワード：トランスローカルティ、クリエイティブクラス、新しい家族）